

## 降誕節第2主日礼拝説教「神の子のしるし」

日本基督教団石神井教会 2019年1月6日公現日

### 【旧約聖書日課】ヨシュア記 3章1～17節

<sup>1</sup>ヨシュアは、朝早く起き、イスラエルの人々すべてと共にシティムを出発し、ヨルダン川の岸に着いたが、川を渡る前に、そこで野営した。<sup>2</sup>三日たってから、民の役人は宿営の中を巡り、<sup>3</sup>民に命じた。

「あなたたちは、あなたたちの神、主の契約の箱をレビ人の祭司たちが担ぐのを見たなら、今いる所をたって、その後につけ。<sup>4</sup>契約の箱との間には約二千アンマの距離をとり、それ以上近寄ってはならない。そうすれば、これまで一度も通ったことのない道であるが、あなたたちの行くべき道は分かる。」

<sup>5</sup>ヨシュアは民に言った。

「自分自身を聖別せよ。主は明日、あなたたちの中に驚くべきことを行われる。」

<sup>6</sup>ヨシュアが祭司たちに、「契約の箱を担ぎ、民の先に立って、川を渡れ」と命じると、彼らは契約の箱を担ぎ、民の先に立って進んだ。

<sup>7</sup>主はヨシュアに言われた。

「今日から、全イスラエルの見ている前であなたを大いなる者にする。そして、わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいることを、すべての者に知らせる。<sup>8</sup>あなたは、契約の箱を担ぐ祭司たちに、ヨルダン川の水際に着いたら、ヨルダン川の中に立ち止まれと命じなさい。」

<sup>9</sup>ヨシュアはイスラエルの人々に、「ここに来て、あなたたちの神、主の言葉を聞け」と命じ、<sup>10</sup>こう言った。「生ける神があなたたちの間におられて、カナン人、ヘト人、ヒビ人、ペリジ人、ギルガシ人、アモリ人、エブス人をあなたたちの前から完全に追い払ってくださることは、次のことで分かる。<sup>11</sup>見よ、全地の主の契約の箱があなたたちの先に立ってヨルダン川を渡って行く。<sup>12</sup>今、イスラエルの各部族から一人ずつ、計十二人を選び出せ。<sup>13</sup>全地の主である主の箱を担ぐ祭司たちの足がヨルダン川の水に入ると、川上から流れてくる水がせき止められ、ヨルダン川の水は、壁のように立つであろう。」

<sup>14</sup>ヨルダン川を渡るため、民が天幕を後にしたとき、契約の箱を担いだ祭司たちは、民の先頭に立ち、<sup>15</sup>ヨルダン川に達した。春の刈り入れの時期で、ヨルダン川の水は堤を越えんばかりに満ちていたが、箱を担ぐ祭司たちの足が水際に浸ると、<sup>16</sup>川上から流れてくる水は、はるか遠くのツアレタンの隣町アダムで壁のように立った。そのため、アラバの海すなわち塩の海に流れ込む水は全く断たれ、民はエリコに向かって渡ることができた。<sup>17</sup>主の契約の箱を担いだ祭司たちがヨルダン川の真ん中の干上がった川床に立ち止まっているうちに、全イスラエルは干上がった川床を渡り、民はすべてヨルダン川を渡り終わった。

### 【福音書日課】ルカによる福音書 3章15～22節

<sup>15</sup>民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。<sup>16</sup>そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。<sup>17</sup>そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」<sup>18</sup>ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。<sup>19</sup>ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、<sup>20</sup>ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

<sup>21</sup>民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられると、天が開け、<sup>22</sup>聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に降って来た。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

## 《降誕祭》から《公現祭》へ

新年最初の主の日を迎えました。わたしたちの教会では元旦礼拝をしていませんから、今日が新年最初の礼拝となりました。朝から新年のご挨拶を交わされた方も少なくないと思います。まだ幾分かの正月気分が残された中で、新年最初の礼拝に赴いてくださったのではないのでしょうか。そのような皆さんのために、今日は、礼拝後のコーヒータイムでお汁粉がふるまわれます。

お汁粉は、正月と結び付けられる食べ物のひとつでしょう。そのような食べ物が、教会でも新年最初の日曜日にふるまわれる。これは、今後もずっと続けられて石神井教会の習慣となり、伝統となっていくのでしょうか。

キリスト教の文化の中では、古い時代から、教会暦の季節ごとに味わう菓子や料理が、伝統として受け継がれてきました。日頃熱心に教会に通っているとは言えないような人々も、そのような食の習慣や伝統を受け継ぐことを通して、教会暦の季節を生活の中に刻み込んできたのでしょう。今日は、1月6日「公現日」、「エピファニー」と呼ばれる教会暦の一日です。今年はたまたま日曜日に重なりました。この「公現日」にも、伝統的に食べられてきた菓子があります。地方によって呼び方や作り方が違うようで、たとえばフランスでは「ガレット・デ・ロワ」と呼ばれるようですが、たいていは、王冠を模した形をしていて、中に小さな陶器製の人形が隠されているのです。切り分けたときに人形が当たった人には、紙製の王冠が被せられたりする。菓子の伝統と共に、楽しい祝いの習慣が受け継がれてきたのです。

「公現日」は、西方教会では、「王」と関連付けて祝われてきました。わたしたちが「三人の博士」と呼び習わしている「東方の占星術の学者たち」のことを、「三賢者」あるいは「三人の王」と呼んできた人たちがいます。「公現日」は、その東方の学者たちが幼子イエスのもとに辿り着き、御子イエスが異邦人の前に顕現されたことを祝う日とされてきたのです。一方で、東方教会では、この祝いの中で、主イエスが洗礼をお受けになられたことも記念されてきたようです。主イエスが公の活動を始められて人々の前でご自身を神の子として現されるようになったのは、ヨルダン川で洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになられた、まさにそのときからだと言うことができるからです。

今日の福音書日課は、主イエスが洗礼をお受けになられたことを伝えています。他の福音書でも共通して伝えられているように、この出来事は、主イエスの公の活動の始まりをしるしづけることとして、ことさら重要な出来事として初代教会以来、語り継がれてきたのです。

そのとき、天が開け、聖霊が主イエスの上に降り、そして、天からの声が響き渡りました、「あなたはわたしの愛する子」。神が、主イエスを「神の子」と宣言してくださった、というのです。いわば、「王」としての神が、「王子」として生まれた主イエスに、王位継承を約束する宣言をなされたのです、「イエスこそ、真の王にふさわしい」と。

これが、降誕祭に続く公現祭でわたしたちが祝っていることなのです。

## 洗礼を受けた人々のただ中で

「公現日」は、東方教会では、「降誕日」以上に盛大に祝われるそうです。「降誕日」にはまだ、暗闇の中に見出された密やかな光に過ぎなかったものが、「公現日」には太陽のように光り輝く「王」の栄光を帯びるようになる。降誕祭の祝いは、公現祭の祝いでクライマックスを迎えるのです。

残念ながら、わたしたちの習慣では、クリスマスを降誕日前夜に祝うと、その後は、もう「祭りの後の静けさ」のような状態になってしまうようです。おそらく、「今日は公現祭だ」とはりきって礼拝においでくださった方は皆無だというのが、本当のところでしょう。けれども、たとえ公現祭を公現祭として意識して祝うことがないとしても、わたしたちは、クリスマスを祝った後の新年を迎えたときに、主イエスが洗礼をお受けになられたこの出来事を、しっかりと心に留めることだけはしたいと思うのです。

今日の福音書日課で、そのときの様子が、「**民衆が皆洗礼を受け、イエスも洗礼を受けて祈っておられ**」たと、語り始められていました。原語に即して訳すと、「民衆が皆洗礼を受けているとき、その中で、イエスは洗礼を受け、祈られていた」のです。ルカ福音書は、ほかの福音書が物語るようにではなく、あえて、このように語り始めました。主イエスは、洗礼をすでに受けた人々やこれから受けようとしている人々のただ中に入って来られて、ご自身も洗礼を受けられ、そして祈られた、というのです。

クリスマスの祝いが終わっても日曜日の教会においでの方々は、ここで、ただ幼子としてお生まれの主イエスを迎えるだけでなく、洗礼をお受けになられた主イエスを迎えられています。洗礼をすでに受けた者と、いつか洗礼をお受けになれるであろう皆さんの、共に集められた教会に、洗礼を受けられた主イエスをお迎えしているのです。主イエスの洗礼の出来事は、二千年前のヨルダン川のほとりで一度きりあった過去の出来事ではなく、その後の教会で、今に至るまで続いている。ルカ福音書が語るのは、そのような出来事です。

主イエスは、洗礼をお受けになりました。それは、人々が洗礼を受ける中でのごことです。わたしたちが洗礼を受ける中でのごことです。主イエスがまず洗礼を受けられて、それに倣って洗礼を受けた、というわけではありません。あるいは、まず皆が洗礼を受けた後に、最後に主イエスも洗礼をお受けくださった、というのでもありません。主イエスが先か後か、それは、関係ないのです。洗礼を受ける人々の中に、主イエスがいらっしゃり、主イエスもその一人として洗礼を受けられたお方であるということ。

それはつまり、このわたしが洗礼を受けた同じときに並んで洗礼を受けたあの人が、実は主イエスだったのかもしれない、ということです。わたしより先に洗礼を受けたあの人。わたしより後に洗礼を受けたあの人。その人、この人が、実は主イエスでいらっしゃるのかもしれない。いいえ、これから洗礼を受けようという、まだ教会に来るようになられたばかりのあの人こそ、洗礼をお受けになるために来られた主イエスなのかもしれない。そうではないでしょうか。

## 「神の子よ」

皆さんの中にまだ洗礼を受けられていない方がいらっしゃるので、あまりプレッシャーをかけてはいけないと思います。そうだとすると、わたしたちは、その皆さんにこうお伝えしたいのです、「教会においでになられたあなたを、わたしたちは、主イエスをお迎えするように、お迎えしましょう。あなたが洗礼をお受けになるときは、主イエスが洗礼をお受けになられたときのように、神に祈ってください。そのとき、わたしたちは、洗礼をお受けになられた主イエスのもとで起こったことを、あなたの中に見ることができるでしょう。そのとき、天が開け、あなたの上に聖霊が降るのです。そのとき、天から神の宣言が告げられるのです、あなたは神の子、神の御心に適う人、と」。

教会の皆さん、わたしたちが、家族に、友人に、一人でも多くの方に、洗礼を受けてほしいと願うのは、このことを伝えたいからではないでしょうか。何か「キリスト教」という名の立派な人生哲学や人生訓を身に着けるためではなくて、ただ、主イエスと共に神の子として生きる道を歩んでもらいたい、そのために、わたしたちは、すべての人が洗礼を受けられることを、願っているのではないのでしょうか。

わたしたちは、自分が「神の子」と呼ばれるようになってきていることに、尻込みしてはいけません。「わたしなんて、とんでもない」などと、社交辞令のような謙遜を示す必要はないのです。必要ないどころか、そのような謙遜は、神の御心を台無しにすることになりかねない。神は、洗礼を受けられた主イエスに聖霊を与え、「わたしの愛する子」と宣言してくださったように、わたしたちにも、洗礼と共に、聖霊を降らせ、「あなたは神の子」と宣言してくださっているのです。

けれども、「自分は、洗礼を受けたとき、そのようなことを知らなかった」と言うかもしれません。そうだとすると、そのようなあなたも、自分の前か後に、主イエスが洗礼を受ける者としておいでくださって、洗礼を受けられ、聖霊を与えられ、「あなたは神の子」と宣言されるのを、見たのではなかったのでしょうか。確かに、わたしたちは、見てきたのです。あの方が、この人が、「神の子」と呼ばれているように、この自分も「神の子」と呼ばれる者。その群れに加えられている者。わたしたちは、ただその恵みにあずからせていただいていることを、まっすぐに、素直に、受けとめたらよいのです。

モーセは、ヘブライ人でありながら、ファラオの王女のもとで、王子のように育てられました。ダビデは、羊飼いの息子に過ぎませんでしたが、預言者に油注がれ、神によって王とされる約束を与えられました。わたしたちは、主イエスによって、それよりもはるかに優る恵みを与えられて、「神の子」、「神の王子」と呼ばれる者とされているのです。

恐れることはありません。主イエスは、わたしたちが「神の子」の呼び名にふさわしい者となるための道を、拓いてくださっているのです。その道の入口には、「洗礼」が置かれています。これは、すべての人に開かれた入口なのです。